OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	阪大社会言語学研究ノート第5号　凡例
Author(s)	
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2003, 5, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23228
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

凡例

1. インフォーマント情報

- 方言ＳＳプロジェクト：先の記号＝世代、後の記号＝役割および場面
- 中間言語ＳＳプロジェクト：先の記号＝母語、後の記号＝役割および場面

世代	：Ｓ＝老年層（senior）　Ｙ＝若年層（young）
母語	：Ｂ＝ポルトガル語　Ｃ＝中国語　Ｅ＝英語
	Ｆ＝フランス語　Ｋ＝韓国語　Ｎ＝ネパール語
	Ｊ＝日本語　Ｓ＝シンハラ語
役割等	：Ａ＝分析対象者　Ｃ＝生え抜き対話相手（カジュアル場面）
	Ｆ＝調査者（フォーマル場面）　Ｔ＝教師
例：SA＝老年層分析対象者、YF＝若年層調査者	
例：KA＝韓国語母語話者の分析対象者、JT ＝日本人教師	

2. 表について

(1) 方言ＳＳの場合、左に老年層、右に若年層の結果をまとめた。

(2) 方言ＳＳ、中間言語ＳＳともに、

左右：左側にカジュアルな場面を、右側にフォーマルな場面を配した。

上下：上にフォーマルな場面で得られた語形を、下にカジュアルな場面で得られた語形を配した。

(3) 表の下には、用例数をカウントする場合や、表の作成を作成するにあたっての処理の方法を記した。

3. 談話データ（文字化の規則）

(1) 冒頭に、談話全体の流れを記した。下線は当該データの話題を示す。

(2) 文字化は、漢字かな混じり、文節ごとの分かち書きを原則とする。但し分かち書きは見易さを配慮したもので厳密なものではない。非言語情報は｛　｝に入れる。

(3) 固有名詞は原則仮名としたが、話者情報の欄に明示されている地名についてはその限りではない。適当な仮名がない場合にアルファベットで表記している箇所もある。

(4) 長音は長音記号「ー」による表記を基本としたが、漢字の方が意味が取りやすい場合には漢字表記を優先する。例：「こーとーがっこー」→「高等学校」

(5) 言い間違い、発音の短縮などはそのまま表記し、意味が取りにくいものについてはその後に［　］を付けて意味を記す。例：いこーそっじゃ［移行措置じゃ］

(6) 相槌など話し手の発話を妨げないものは改行せず、(　)内に話者を明記して記す。

(7) 談話資料によっては、言い淀みなどではっきり発音されていない場合、あるいはいりわたりの鼻音などをｎ、ｔ、などのアルファベットを利用して表記してある。

以 上